

昭和戦前期の青年層における民俗学の 受容・活用についての研究

期間：2017年4月1日～2020年3月31日

〔代表者〕丸山泰明（天理大学）

黛 友明（市川市文化スポーツ部文化振興課）

〔共同研究者〕木村裕樹（立命館大学）

室井康成（民俗学・東アジア近現代史）

小林光一郎（日本常民文化研究所）

小熊 誠（日本常民文化研究所）

第6回共同研究フォーラム 国際常民文化研究機構・共同研究（奨励）成果発表会

「青年と学問」の時代

——昭和戦前期の郷土と民俗学——

日程 2019年7月6日（土）13:30～17:30

会場 神奈川大学横浜キャンパス3号館405講義室

〔プログラム〕

問題提起

丸山泰明（共同研究代表者・天理大学准教授）

「日本青年館と地方青年団——宮城県気仙沼大島の青年団資料による」

小熊 誠（共同研究者・神奈川大学日本常民文化研究所員）

「選挙粛正運動と青年団——司馬遼太郎の“若衆”観からの問い」

室井康成（共同研究者・民俗学者）

「アチック・ミュージアムと大日本聯合青年団の関連性——アチック同人大西伍一を事例に」

小林光一郎（共同研究者・神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）

「青年による副業の研究——郷土工芸を中心に」

木村裕樹（共同研究者・立命館大学准教授）

「青年は「郷土」を踊れたか——「郷土舞踊と民謡の会」の理念と現実」

黛 友明（共同研究者・市川市文化スポーツ部文化振興課）

コメント 重信幸彦（東京理科大学非常勤講師）



写真1 会場風景



写真2 発表の様子

3年間の共同研究を終えて

研究代表者 丸山 泰明

本共同研究は、昭和戦前期の農山漁村の青年層において民俗学がどのように受容され、郷土の生活・生業の改善に活用されたのかについて明らかにすることを計画して実施したものである。具体的には、青年団の中央組織である日本青年館および大日本聯合青年団の事業に焦点をあわせ、事業にかかわった日本青年団幹部の田澤義鋪や民俗学者の柳田國男などの知識人、および地方の青年たちの取り組みについて検討した。

共同研究を開始した2017年度と翌2018年度には、調査を行うとともに、研究会を開催した。資料調査は、資料を数多く所有する日本青年館をはじめとして、工学院大学図書館や東京都市大学図書館蔵田周忠文庫にて調査を行った。地方の状況について調べるために、岩手県の雫石町立図書館が所蔵する田中喜多美資料や、山形県新庄市の雪の里情報館の所蔵資料についても調査した。また、定期的に研究会を開催して、資料調査や研究の成果を共有し、意見を交換した。

昭和戦前期の日本青年館においては、民俗芸能のイベントである郷土舞踊と民謡の会が毎年開催され、民俗博物館であった大日本聯合青年団郷土資料陳列所が展示を行っていた。2年間の調査・研究の成果として、郷土舞踊と民謡の会や大日本聯合青年団郷土資料陳列所は、同時期に青年団運動において進められていた政治教育や農村更生、衣食住などの生活の改善、郷土工芸の研究、副産品の開発・生産、青年の娯楽の提案などと密接に結びついていた様相が明らかになってきた。これまで民俗学において日本青年館は、民間伝承の会（後の日本民俗学会）の発足のきっかけとなった、1935年の柳田國男の還暦を記念して開催された日本民俗学講習会の会場であることが知られていた。しかし、日本青年館はただの会場として単発的に使われたわけではなく、民俗学の関連する多



写真3 柳田國男の著書『青年と学問』と『郷土研究十講』

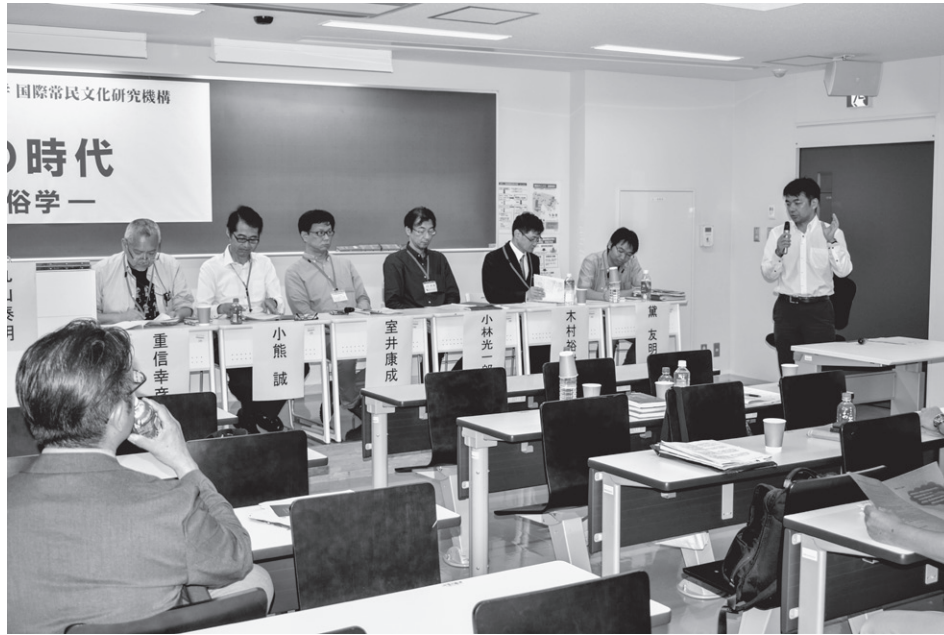


写真4 第6回共同研究フォーラム（2019年7月）

様な活動が行われていた。そして、今日のアカデミックな学問となった民俗学が、当初は社会と青年に関わろうとする多様な可能性をもった運動であったことがわかってきたのである。

このような2年間の調査・研究活動の成果を公開するために、2019年度は共同研究フォーラムの開催と、研究成果報告書の刊行を行った。以下、それぞれについて、より具体的に説明することにした。

フォーラムは2019年7月6日に神奈川大学横浜キャンパスを会場にして開催した。フォーラムのタイトルは、「青年と学問」の時代——昭和戦前期の郷土と民俗学」とした。フォーラムの開催趣旨は次の通りである。



写真5 フォーラム記念写真

青年に対し、学問は何ができるのだろうか。

柳田國男が1928年に上梓した『青年と学問』の出版元であり、柳田の還暦記念として1935年に日本民俗学講習会が開催された日本青年館は民俗学の拠点だった。東京・明治神宮外苑の地を拠点として全国の青年団を結びつけた日本青年館は、郷土の更生をその土地に生きる青年に期待した。青年を主体とし、教育・工芸・芸能を通じて郷土の発展を促そうとする取り組みに、柳田國男や渋沢敬三・今和次郎といった民俗学者も関わっていく。しかし、1937年に日中戦争が勃発し社会情勢が大きく変化する中で、急速に途絶えてしまった。

普通選挙実施により政治と言論が大衆化し、地方の農山漁村の文化・生活が着目され、レコードやラジオなどの新たなメディアが浸透した昭和戦前期において、郷土と青年に民俗学という学問はどのように関わったのか。地方創生に若者の活躍が期待され、大学に地域系の学部がひしめく時代に問い返す。

フォーラムのメインタイトルは、民俗学者の柳田國男が1928年に出版した著書『青年と学問』に由来するものである。共同研究の代表者として、そしてフォーラムの企画者としての意図は、『青年と学問』が日本青年館から出版されたことに象徴されるように、当時において青年の学問としての民俗学はどのような意味を持っていたのかを考えることであった。この問題を、民俗学史という狭い枠組みに留めず、地方の青年と民俗学の関係を、政治・経済・社会・マスメディアとの関係までも視野を広げることによって、当時の文化的・社会的背景に位置づけ、文化史・社会史まで問いの射程をのばしたいという思いもあった。そしてまた研究者としてだけでなく、当時、天理大学文学部歴史文化学科考古学・民俗学研究コースにて民俗学を若者たちに教える教員として、青年／若者に民俗学はどのような意義があるのかを、時代を超え、そして時代を結びつけながら考えたいという問題意識があった。

このような企画のもと、代表である私と共同研究の各メンバーが報告を行った。共同研究の各メンバーの発表の後のコメントは、民俗学者の重信幸彦氏にお願いした。重信氏は、『タクシー／モダン東京民俗誌』（日本エディタースクール出版部、1999年）や『みんなで戦争 銃後美談と戦争の



写真6 懇親会の光景

神奈川大学日本常民文化研究所調査報告

昭和戦前期の青年層における
民俗学の受容・活用についての研究

(国際常民文化研究機構 共同研究〔奨励〕 調査報告書)



写真7 『昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究』表紙



写真8 明治神宮外苑 (絵葉書)

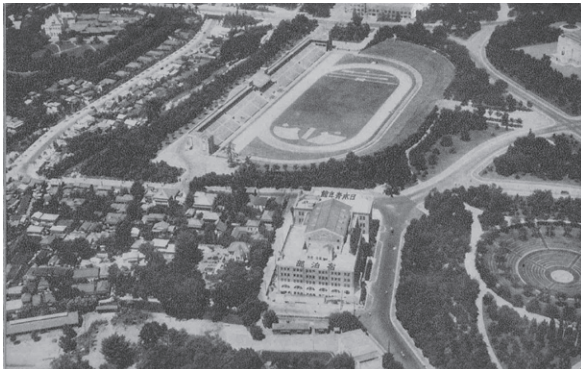


写真9 日本青年館 (絵葉書)

フォークロア』(青弓社、2019年)などの大正・昭和戦前期に関する著作があり、口承という視角から民俗学のあり方と歴史を問い直してきた研究者でもあることから、特にお願ひした。重信氏からは、青年たちが郷土を認識し表現する言葉とメディアに着目し、話し書く「青年団リテラシー」という視点をはじめとして、共同研究テーマをもう一段奥底から掘り返すコメントをしていただいた。

なお、フォーラムには共同研究を行うにあたってたいへんお世話になった日本青年館から3人の方にお越しいただき、フォーラム後に開催した懇親会にもご参加いただいたことを、ここに記録として残しておきたい。

フォーラムの後、研究成果報告書を編集する作業に本格的に取りかかった。報告書は、共同研究の各メンバーによる論考と、調査の過程で収集・整理した資料を掲載することを目指した。最終的に完成した報告書の構成は、次の通りである。

「第1部 論考篇」では、共同研究のメンバーのうち、室井康成、小林光一郎、木村裕樹、黛友明の各氏にフォーラムでの報告をもとにした論文を執筆していただいた。フォーラムの限られた時間内では言及しきれなかった部分をも含みこむ充実した論考となっている。日本青年館および大日本聯合青年団の理事・理事長を務めた田澤義舗を取り上げ、政治教育と青年団の関わりを「民俗」の視点から検討した室井康成。大日本聯合青年団に嘱託で勤務し郷土資料所の準備・運営にたずさわりながら優秀な地方の青年たちを見出して連絡を取り、渋沢敬三が主宰するアチック・ミュージアムにも関わって、人脈と知を結びつけるネットワークの要の役割を果たした大西伍一を論じた小林光一郎。昭和初期の経済恐慌の中で奨励された副業品の生産をめぐる、山形県新庄町の青年である小野恵敏を中心に青年たちの群像を掘り起こした木村裕樹。民家研究者・建築家として業績を残し評価されている竹内芳太郎について、これまで省み

られてこなかった民俗芸能研究の活動に光を当てた黛友明。日本青年館および大日本聯合青年団の幹部と職員、知識人、地方の青年をそれぞれ取り上げるバランスの良い論考を構成することができた。

「第2部 資料篇」は、地方の青年たちと、東京にある中央の日本青年館および大日本聯合青年団の関わりを可視化できる資料を掲載した。『日本青年新聞』の記事目録や刊行物、青年たちが大日本聯合青年団郷土資料陳列所に寄贈した資料、郷土舞踊と民謡の会の写真によって、当時における人々の動きや問題意識、青年たちの姿が見えてくるはずである。

また、本共同研究の過程で収集したものではないが、大西伍一のご遺族である路男氏から神奈川大学日本常民文化研究所にご寄贈いただいた大西伍一の旧蔵写真を収録している。

共同研究成果報告書の刊行をもって、2017年度から2019年度までの合計3年間にわたった本共同研究はひとまず幕を引くことになる。共同研究を実施した3年の間、研究代表者である私は、調査で日本青年館に足を運ぶたびに、何度もかつて日本青年館があった場所に立ち寄り、当時に想いを馳せた。本稿で調査のために訪れたと書いてきた日本青年館は、2017年6月に完成した3代目の建物であり、1代目・2代目の建物があった場所からやや南側に移転している（本共同研究では、引っ越ししたばかりで整理のすんでいない資料を調査させていただいた。慌ただしい折にもかかわらず調査を受け入れて下さった日本青年館のご好意に、この場を借りて改めて感謝を申し上げたい）。元々の建物は、2020年に開催が予定された東京オリンピック・パラリンピックのメイン会場とすることを念頭にして建て替えられた国立競技場の敷地拡張のため取り壊された。日本青年館の西隣にあった明治記念公園の敷地の一角には、大日本聯合青年団郷土資料陳列所を拡充した「日本民族博物館」を建設する構想もかつてあったが、その場所も国立競技場の敷地となった。

1920年代に首都東京のモダンな空間として誕生した明治神宮外苑は、100年後の今日、東京オリンピック後を見据えて再整備が計画され、新たに変わりつつある。このような時代において、この地においてかつて人々が熱心に民俗学に取り組み、そして戦争さえなければ日本の民俗学の拠点の一つになっていたかもしれなかった可能性を明らかにできたことも、共同研究の意義の一つである。

■ 2019年度の活動

- 成果報告書・フォーラム打合せ 2019年4月15日 国際常民文化研究機構 丸山泰明
- 成果報告書・フォーラム打合せ 2019年6月24日 国際常民文化研究機構 丸山泰明・小熊誠・重信幸彦（東京理科大学非常勤講師）
- 第6回共同研究フォーラム「青年と学問」の時代——昭和戦前期の郷土と民俗学—— 2019年7月6日
神奈川大学横浜キャンパス3号館405講義室
丸山泰明・小熊誠・室井康成・小林光一郎・木村裕樹・黛友明・重信幸彦
- 成果報告書編集会議 2019年8月31日・9月1日 神奈川大学横浜キャンパス3号館、日本常民文化研究所
丸山泰明・小熊誠・木村裕樹・小林光一郎・黛友明・室井康成
- 『昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第28集（国際常民文化研究機構 共同研究〔奨励〕調査報告書）2020年2月25日



写真10 建設中の国立競技場
（中央の三叉路の角にかつての日本青年館があった。2017年8月23日に日本青年館から撮影）